[redacted]

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 62　No. 2　2010

主幹　佐野 正之

巻頭言

「言葉の力」の育成について思う

兵庫教育大学名誉教授●青木 昭六

新学習指導要領の特色の一つは，理数系学力，伝統文化，英語力を重要な三本柱として掲げ，これらを含め，すべての教科・領域の教育の基礎能力として，「言葉の力」の育成が必要であることを強調していることである。

前段の文脈から明らかなように，「言葉の力」とは，言葉による認識，思考，判断の原動力となる認知的学習能力を意味している。したがって，「英語力」としてこの能力を育成するためには，従来，「役に立つ英語」に代表されるような言語の外的機能である伝達行為の華々しさに目を奪われ，情報処理のために重要な基盤である内的機能，つまり，認識，思考，価値判断という本来的機能を軽視しがちであったことへの反省とその弱点の補強が必要である。

反省すべき点は，CLTに対する熱意が単純化し，正確な文法能力よりも方略的能力に依存したり，意味と形式の関係について深い情報処理能力を必要としない日常会話や特定場面に言語形式を隷属させる“Situational Grammar Exercises”に矮小化した活動が主流になり，結果的に，活動は機械的な情報格差活動に終わりがちで，推論や意見格差による意味の評価や交渉という創造的な活動が貧弱になったことである。

一方，まず補強すべき点は，「コミュニケーションが成功したと言えるのは，聞き手が発話の言語的意味を認識したときではなく，そこから話し手の『意味』を推論したときである」という観点から，言語習得上必要な認知的諸能力（＝暗記，関連づけ，推論，説明）の中で，特に，推論（与えられた情報にもとづいて推論することによって，まったく新しい情報を創り出す），説明（関連づけや推論を，なぜ，どのように行ったかをテクスト中の証拠によって説明する）の能力を漸進的に強化していくことである。

両者の改善の鍵は，テクスト中の言語形式に内在する意味の可能性について推論を促す発問の開発と持続的試行にあり，これを，文法能力の精緻化や内発的動機づけにつなげることである。試行してみると，そう臆することではないことがわかる。

21世紀の英語教育と教科書を考える

新学習指導要領に向けて目指すべき指導

効果的な語彙指導のありかた

兵庫教育大学教授　**山岡 俊比古**

1. 語を知ることの意味

すでに母語を身につけている外国語学習者は外国語の語彙を学ぶ点において有利である。たとえば日本語母語話者が英語のanimalやdogを学ぶとき，それぞれが表す意味の「動物」と「犬」は母語において学習済みであり，改めて学ぶ必要がない。

しかしながら，外国語の語彙を学び，それを知ることには，その意味を知る以上のことが含まれている。たとえば「私は動物好きで，犬を飼っている」という意味を英語で表現するにはI like animals. And I have a dog. などのように表現する必要がある。つまり，それぞれの語の意味情報に加えて，各語の文法的な意味での使い方についての情報も知っている必要がある。具体的には，animalとdogはいずれも可算名詞で，その動物一般を言うときには　おおむね冠詞のない複数形を使い，個別に入ると冠詞とともに用い，単複の区別をするという使い方を知る必要がある。

より一般的に言えば，語を知るということは，語に関して少なくとも以下のことについて知ることを意味する。

(1) 発音
(2) 綴り
(3) 意味
(4) 文法

英語の語彙学習の発音指導においては，英語に独特な音（例：f, v, θ, ð, r, æ, ə），音節構造（子音連結を伴う閉音節），強勢アクセント（高低アクセントではない）など，日本語との違いに重きを置き，まさに外国語を学んでいるという実感を生徒に得させることが望ましい。

綴りにおいては，文字と音の一貫した対応関係の欠如という英語の特徴を踏まえ（たとえばcat, father, fall, cake, animalの下線部の発音はそれぞれ異なる），意識的に綴りを学ぶ必要性を認識させなければならない。

意味については，多くの語，とりわけ基本動詞のほとんどが多義的であることから，意味の確認においては基本的な意味から展開していくことが理にかなっている（例：make bread → make a mistake → make milk into butter → make her happy）。

語彙がもつ文法的な情報の学習は大切で，文の基本構造を決定する役割を担う動詞においてとりわけその重要性が増す。たとえば，動詞の文型における種類（例：Birds sing. / Sue likes cats. / I gave him a present. / You look young. / The letter made me surprised.）や使い方の型（例：I want water. ― I want to go there. ― I want you to go there.）を学習するためには，語とその意味の単純な対応関係の形成にとどまらず，少なくとも文レベルにおけるその具体的な用法に触れることが不可欠である。

2. 効果的な語彙の導入

語彙学習においては，上で述べたように語彙がもつ多面的な情報をできるかぎり多く学ばなければならないが，語彙の導入においては，そのような情報を可能なかぎり広く活性化しながら行うことが必要となる。

授業の最初にOral Introductionが行われることが多いが，これに語彙導入という役割も含め，新出語が出てくるたびに相互に関連づけながら順番に黒板に文字で示し，その意味を表す実物，イラスト，写真などを同時に貼り付けると，日本語を経由しない，生き生きとした言語使用の中でそれらの語を導入することができる。この際，教師による一方的な導入だけでなく，生徒とのやりとりも含めると，より効果的である。

また，その日の教材のキーワードを取り上げ，その学習を目的として焦点化し，それぞれを教材内容に関係づけて語彙的に説明していくことも可能である。その際にも，キーワードも含めて必要な語を綴りで示し，同時に関連情報を視覚的に提示することになる。

いずれにしろ，語彙の導入における提示が，具体的に，音声として，綴りも示しながら，視覚情報とともに，一貫した談話的コンテキストの中で行われることが大切である。

なお，動詞の文法情報（文型の種類と使用の型）に関しては，何らかの方法でそれに向けて生徒の意識を意図的に高め，その認識を促すことが必要である。

3. 語彙の定着を図る指導

語彙の学習には時間がかかる。一度導入された語でも，時間が経てば忘れてしまう。英語に触れる機会が，はなはだかぎられている外国語学習環境では，なおさらそうである。したがって，語彙を継続的にくり返して生徒に経験させることが必要となる。そのために，Oral Introduction, Classroom English，Small Talkなどの機会に，教師が意図的に既出語を使用することが必要となる。

語彙学習という観点で，不規則動詞の過去形は生徒に絶望的な学習負担感を与えることが多いが，教師があらゆる機会にそれを使って示せば，生徒の側で，ことばは意図的な学習というより，むしろ具体的な使用における体験の中で身につく場合もあるということを実感すると思われる。

もちろん，ある程度まで語彙量が増えれば，語彙の学習そのものに焦点化した学習活動が可能となる。音読，Read & Look-up，Odd One Out，単語しりとり（綴りでつなぐ），語彙クイズ（定義を与えてその語を当てる），語形成・語源の利用などがそれに含まれる。

4. 語彙学習方略の指導

外国語の学習は教室での学習に加えて，教室外での学習も必須である。したがって，生徒は教師の指導がないところで，自分自身で学習を計画し，実行し，自己チェックすることが求められる。そのためには，生徒は外国語の効果的な学習方法を身につけておく必要がある。このような方法を学習方略と呼ぶが，これは自律的な学習者となるための鍵となるものである。

とりわけ語彙の学習においては，自律的な語彙学習方略が必要となる。これは，生徒が身につける語彙のすべてが教室で丁寧に導入され，十分にくり返されるとはかぎらないからである。

これまでに行われてきた語彙学習方略を扱った研究から，すべての生徒に当てはまるベストな方略は存在しないこと，優れた語彙学習者はそうでない学習者に比べて，よりたくさんのさまざまな方略を，より頻繁に，より一貫して使っていることが明らかとなっている。

一方で，生徒は自分に合った学習スタイル（視覚型，聴覚型，運動型，手動型）をもっており，かつそのスタイルのみによって学習するものでもなく，他方で，語彙学習において必要とされる情報は多面的であることを考えると，上で述べた優れた語彙学習者がもつ特徴は当然のことと言える。

したがって，多様な語彙学習方略の存在を生徒に認識させ，その使用を教えることも語彙学習指導の重要な課題となる。ただ単に英語の単語と日本語で示されたその意味とのつながりを覚えるようなやり方のみでは物足りない（もっとも，これ自体が無意味ということではなく，語彙学習の一段階として位置づければ問題はない。実際，語彙リストによる学習が効果的であることが確認されている）。語彙学習方略を駆使することによって，より積極的かつ意欲的に，語がもつ多面的な情報ともども語を学ぶことが，英語をコミュニケーションのために使うべく学ぶことへと直結するという実感を生徒が得ることができるようになる。

参考資料

門田修平・池村大一郎（編著）.（2006）.『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店

Folse, K. S.（2004）. *Vocabulary myths: Applying second language research to classroom teaching.* University of Michigan Press.

21世紀の英語教育と教科書を考える

新学習指導要領に向けて目指すべき指導

動詞管理術

北海道八雲町立野田生中学校教頭　**澤村 早苗**

1. 語彙力を高めるために

英語学習における基礎学力や基礎・基本については，多様な考え方やとらえ方があるが，私は以下のように考える。英語学習の基礎・基本は「語彙力と文法能力」を身につけることであり，それが４技能(聞く力・読む力・話す力・書く力)の支えとなり，コミュニケーション能力を身につける基礎になる。

ここで言う語彙力は，①どれだけ多くの単語を知っているかというサイズの側面，②どれくらいの単語についてよく知っているかという知識の深さの側面，③どれくらい速く単語を理解したり取り出したりできるかという認知速度の側面の３点からとらえる。

その中で，私は①に焦点を当てた教科書の新出語における動詞の指導の取り組みを紹介したい。

2. 動詞管理術

(1) 1学年 5月

・４月の授業開きでは学習の心構えや授業の受け方に関してのオリエンテーションを経て，学び方の基礎・基本(学習用具の準備，課題の取り組み方，ノートのとりかた，辞書の引き方，家庭学習の仕方)を指導する。そして入門期指導を終えた段階で，９品詞の中で動詞が一番重要であることを説明し，be動詞と一般動詞を区別して覚えることを説明する(動詞はその特性から効率的に変化形を覚えることにより，簡単に単語数が増え，動作や状態を表す語なので感覚的に容易に覚えられる。また動詞は比較的綴りが短いので他の品詞に比較して覚えやすい。動詞は文中における中心的な役割を果たす語である)。

・以下，一般動詞が教科書に出てきた段階で教科書の覚えたい語句(新出語)の欄に赤のボールペンでアンダーラインを引かせ，１，２，３…と番号をふらせる。授業の初めに番号札を見せ，発音させていく。時に意味を言わせたり，日本語から英語を言わせたりと徹底的にトレーニングする(単語は暗記しなければならないことをすり込む)。

・慣れてきたら，教科書(*Sunshine 1*)の巻末資料11の「アクションカード」にあるように語句として活用できるよう，最初はチャンツで音声指導を重ねながら徐々に文として言えるようにしていく。

(2) 1学年10月 3人称単数現在形

・10月までに学習した一般動詞の原形のみが書かれた以下の表を配付し，原形動詞カードを見せながら発音復習，意味の確認(ゲーム方式)，３単現の -s(-es)形のつけ方を説明後，分類させる。

その後，生徒に３単現の -s(-es)形を記入させる。最後に発音の仕方が３通り(s, z, iz)あることを教え，語尾の発音を聞き取らせ，発音欄に記入させる。

	原形動詞	意味	３単現の -s(-es)形	発音	確認欄
1	meet	会う	meets	[s]	

〈ルール①〉

語尾に -es をつける動詞は番号欄に○印をつけさせる。

〈ルール②〉

語尾の y を i に変えて -es をつける動詞は番号欄に△印をつけさせる。

〈ルール③〉

そのまま -s をつける動詞は無印。

・これを授業のウォームアップに取り入れる。口慣らしの練習には最適であり，教師対生徒，生徒対生徒，列対抗など指導形態を工夫する。

※以下(3)，(4)においても同様の指導をしている。

(3) 1学年12月 現在進行形

(4) 1学年 1月 過去形

・動詞は変化することを徹底して教える。特に語尾の変化や時制によって動詞は使い分けをしなければならないことを説明する。

・変化については，規則的に変化するものはルールを説明し，不規則に変化するものは徹底的にトレーニングさせる。慣れてくると，不規則に変化するものであっても，ある程度の規則性を習得できる。

・この時点で原形動詞，過去形，過去分詞形を教え込む。動詞は３つを一気にリズミカルに３拍子で覚えた方が頭に入りやすい。メトロノームを使い，トレーニングを積ませる。徐々にスピードアップを図る。どうせ後で覚えなければならないものは先に覚えてしまうと得した気分になる。

(5) 1学年 3月(春季休業中)

・２学年の教科書の覚えたい語句のうちの不規則動詞は宿題にする。

(6) 2学年 3月(春季休業中)

・３学年の教科書の覚えたい語句のうちの不規則動詞は宿題にする。

3. おわりに

次のリストからわかるように，動詞に関して言えば，１年生で習得を意識づけ，整理させながら丁寧な指導を重ねることにより２年生，３年生へと楽に移行することができる。また，生徒は数多くの動詞に出会うたびに不規則動詞であっても，ある程度の変化のイメージができるようになり，類推しながら学習を進めることが可能である。さらに，２年生ぐらいになると，同義語・反対語・同音異義語・派生語などを意識させると，１つの新出動詞から多くの動詞を学習することができる。

語彙指導は，生徒の「頭」，「目」，「耳」，「手」に印象深く記憶させることが重要である。そのためには，我々教師は手間ひまかけて，丁寧な指導を常に心がけなければならない。

■1年生 新出一般動詞リスト(*Sunshine 1*)

1. meet	2. speak	3. play
4. have	5. like	6. eat
7. study	8. go	9. need
10. know	11. get	12. come
13. take	14. worry	15. touch
16. see	17. love	18. wait
19. say	20. look	21. relax
22. close	23. stop	24. watch
25. enjoy	26. visit	27. live
28. fall	29. hold	30. stay
31. use	32. make	33. talk
34. respect	35. carry	36. sing
37. learn	38. communicate	39. laugh
40. understand	41. press	42. answer
43. write	44. wash	45. call
46. help	47. walk	48. want
49. lead	50. drop	51. jump
52. hear	53. believe	54. tell
55. work	56. move	57. whistle
58. turn	59. climb	60. follow
61. discover	62. thank	63. buy
64. forget	65. cook	66. introduce
67. quarrel	68. report	69. find

70. raise(以上70語 付録Reading，補充Readingも含む)

※２年生新出一般動詞　61語
※３年生新出一般動詞　44語

21世紀の英語教育と教科書を考える

新学習指導要領に向けて目指すべき指導

語彙を身につけ，英語ワールドで快適ドライブ

元 新潟大学教育学部附属長岡中学校教諭　小林 貴英

1. はじめに

アクセルを踏めば車は進む。ハンドルを回せば車は曲がる。幼い頃，父が運転する姿を見てそれを知った。自動車教習所での初運転は急発進。そのとき初めてアクセルを踏み込む加減を知った。カーブでの走行。対向車線にはみ出した。車のスピードとハンドルを回すタイミングの関係に気づいた。今では細かなことを考えなくても，安全に運転ができる。

その通り。知識だけでは運転はできません。実際にやり，失敗を重ねることで上達します。何度もくり返すことで無意識にできるようになります。きっと英語学習も同様であると思います。

2. 言語活動において留意している4つのこと

前述の考えから私が授業で大切にしている第1点目は，アウトプット活動を設定することです。そこでは，自分の英語力（運転技能）の上達や未熟さを確認できます。多様な活動が考えられます。

2点目は，チャンクやその他の語句のリサイクルと言語活動のレベルアップです。生徒に「使える」という実感と自信をもたせるためです。車の運転にたとえれば，加速・減速という基本動作の練習をくり返しながら，片側2車線道路，高速道路での走行というように段階を上げていくことです。

3点目は，目標言語材料の使用だけにとどまらない活動を設定することです。これは，目標言語材料の使用場面を判断する力をつけるためです。クランク走行，車線変更，縦列駐車…。必要なときに必要なことをできるようになります。

4点目は，“add”の奨励です。自分のセリフにもう1文加えることで話題がふくらみ，会話が楽しくなることを実感させます。運転という行為以外のことを取り入れます。たとえば窓を開けて新鮮な空気を入れる，といったところでしょうか。

こうして運転技能を身につけ，高めながら，次第に快適なドライブができるようになります。

3. 語彙力について

Nation（2001）は，「単語を知っているということは，その語を語形，意味，使用の側面から知っていることである」としています。そして，それぞれをさらに3つの下位区分に分類しています。

> 語形…音声・綴り・語の構成要素
> 意味…語形と意味・概念と指示物・連想
> 使用…文法的機能・コロケーション・使用時の制約
> ＊9区分はそれぞれさらに受容語彙，発表語彙に分類される。

これらを念頭において，語彙を定着させるために行った実践を紹介します。

4. 授業の実際 ～3人称単数現在～

(1) ねらい

3単現，および次項（2）の学習内容の定着を目指す。

(2) 学習内容

既習：一般動詞（チャンク），be動詞（am, is, are），疑問詞（what, where, how oldなど）

新出：人の性格や特徴を表す形容詞（kind, tall, strongなど），職業を表す単語（police officer, doctor, farmer, actorなど）

(3) 生徒をやる気にさせる仕掛け

私はこれまで，少なからず英語嫌いの生徒を生んでしまいました。その理由の一つは，煩わしい文法項目に注目させ過ぎていたことだと考えました。この深い反省から，生徒にとって魅力的なテーマを設定することを考えました。たとえば，次年度に予定されている実際のホームステイを見据え，「ホームステイ応募資格をゲットしよう」というものです。一つずつ課題を達成し，自分に英語力がついたことを実感しながら学習を進め，単元末に応募資格認定書をもらえるように活動を仕組みました。驚きでした。生徒の食いつきは予想をはるかに上回るものでした。

「自分の家族のことを伝えよう」「ホストファミリー（HF）のことを知ろう」という活動を，手を変え，品を変えて何度もくり返しました。

(4) 活動の概略

次の①～⑩の活動を，単元構成の柱としました。もちろん，これらの活動を支える基礎的な事項を身につけるための活動も行いました。

①HFに自己紹介の手紙を書こう

今後の活動に必要な基本表現の学習です。

復習事項：氏名，年齢，住所，好きなこと，起床・就寝時間の表現など

新出事項：自分の性格や特徴を表す単語

②面接委員の質問に答えよう（Ⅰ）～自分について～

①で準備した自己紹介文をもとに，面接委員役のパートナーからの質問に答えます。

・What is your hobby?
・Where do you live?
・Are you cheerful?
・Do you like sports? など

be動詞と一般動詞，さまざまな疑問文が混在します。どんな表現を使うべきか判断する訓練です。

③教科書に登場するALTの家族について知ろう

まず，3単現のルールに気づかせ，第3者を紹介するときに便利であることを理解させます。その後，ALTの家族の絵を見てそれらを表現したり，教師からの質問に答えたりします。また，3単現で書かれた本文の主語をⅠに変えて音読します。この音読で3単現とそれ以外の文における動詞の使い方の違いを確認します。

④HFに家族紹介の手紙を書こう

①で学習した表現を再利用しながら，3単現を使うために，「手紙」という表現形式を用います。また，両親について記述するために，「職業名」の学習が必要になります。なお，手紙文にはweやtheyを用いた文の使用を奨励しました。これにより，3単現とそれ以外の文の違いを再確認します。

⑤面接委員の質問に答えよう（Ⅱ）～家族について～

②と同様の活動を行います。

・Is your father tall?
・How old is he?
・What's his job?
・Does your brother ～?など

3単元について理解し，適切に運用する生徒が増えてくる頃です。

⑥教科書に登場するALTの「いとこ」に，教科書には載っていないことを聞こう（学校のALTがいとこ役）

生徒は質問内容を自由に考え，目の前のALTに質問し，ALTは即興でそれに答えます。ALTの応答に対して，追加質問する生徒が現れます。

⑦HFとメールでやりとりしよう

HF役と留学生役を同時に行う活動です。まずHFに質問したいことを考えて英文を書きます。それをパートナーにメール送信します（質問文を書いた紙を手渡す）。同時にパートナーからメールが送信されます（紙が手渡される）。その質問に対して自由に返答します。これを何度もくり返します。質問文が次々と思いつくようになってきます。

⑧HFと電話でやりとりしよう

⑦と同様の活動を，音声言語で即興的に行います。⑦で使った英文のリサイクルですが，文字言語から音声言語への変化があり，生徒は「話せる」という自信をもちます。

⑨HF紹介センターで会話をしよう

HFを探している留学生役（S）1名と，それを紹介するコーディネータ役（C）2名による活動です。Sは指定された人物になりきり，希望にかなったHFを探します。Cは，手元にある家族情報をもとにSの希望にかなったHFを選び，紹介します。Sは2人のCから紹介されたHFのどちらか一方を選びます。職業名や年齢，趣味など，学習してきた語彙が多く含まれています。相手の話を理解したり，自分の思いを伝えたりするというかなり難易度の高い活動ですが，生徒は活動に意欲的に取り組みます。活動に必要な語彙は，くり返し使用することでかなり定着しています。

⑩HFからの手紙を読み，返事を書こう

ホストマザーが書いた家族紹介の手紙を読みます。ここでも，学習してきた英語がふんだんに盛り込まれています。生徒は手紙の内容を難なく読み取った後，自分や家族を紹介したり，相手に質問したりと自由に返事を書いていきます。多くの生徒が，伝えたいことを英語で表現できます。

5. おわりに

3単現の定着に関するデータは取っていませんが，定着度が高いことを，その後の学習における生徒の姿から十分に感じ取ることができます。

「先生！ 昨晩はひどい雨でしたが，無事に運転ができました！」身につけてきたさまざまな運転技能と経験の積み重ねにより，初めての状況にも対応できる生徒が増えてきています。

参考資料

望月正道・相澤一美・投野由紀夫.（2003）.『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店

髙島英幸.（2005）.『英語のタスク活動とタスク』大修館書店

伊東治己.（2008）.『アウトプット重視の英語授業』教育出版

21世紀の英語教育と教科書を考える

新学習指導要領に向けて目指すべき指導

「話す力」の向上を目指した授業の展開

ーデジタル教材の作成とその利用を通してー

岡山県倉敷市立多津美中学校教諭　田中 勇

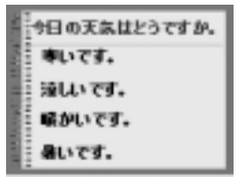
1. はじめに

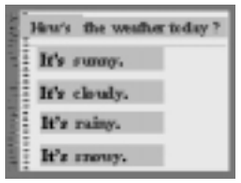
本校では各学年週４時間英語の時間が設けられており，そのうちの１時間はNET（Native English-speaking Teacher）との協同授業を行っている。生徒たちの「聞く力」「話す力」「読む力」「書く力」の４技能をいかにバランスよく伸ばしていくかということが英語教師に課せられた課題と言える。生徒たちは授業の中で教師やNETから英語を聞いたり，教科書の英文をCDを通して聞く機会にも恵まれているが，自分の身近なことについて英語を用いて口頭で表現する時間が一人ひとりにどれほど確保されているかということになるといささか疑問である。そのような状況の中で少しでも授業の効率アップを図るため，昨年度からパソコンによる授業を行ってきた。特に「話す力」をつけるため，次のような教材作りに取り組んでいる。

2. デジタル教材の作成

(1) ウォームアップ教材の作成

ウォームアップ教材

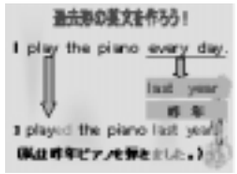




英語によるあいさつや自己紹介などは，すでに小学校で学習している。教科書の基本文を踏まえながら，語彙の幅を広げ，日本語から瞬時に英語で言えるまでトレーニングする。語彙の幅を広げることで教科書の基本文や本文に出てくる単語の先取りもできる。今年度は１年生の担当で，しかも少人数という環境にあるのでどの生徒とも英語でQ&Aができる。英語を話す機会をできるだけ多く授業の中に設けることで，生徒一人ひとりの「話す力」の評価もしやすくなった。生徒とのQ&Aでは，教師の英語の質問に対して英文で答える生徒もいれば，１語や２語の単語で答える生徒もいる。文法的に間違いがあっても許容し，コミュニケーションが成立する答えになっているかどうかを重視している。正確でなければ伝わらないという生徒たちの固定観念を払拭し，気楽に英語で話せるような雰囲気作りにも心がけている。

(2) 教科書のデジタル化

デジタル教科書



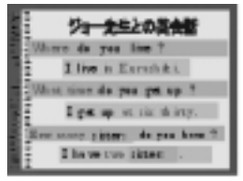
本校は教科・教室型の授業形態（各教科の教師の教室に生徒が移動）を取っており，パソコンで授業するには適した環境にあると言える。パソコンをフルに活用するため，教科書のデータ（絵，単語，本文，日本語訳など）をパソコンに取り込み，パワーポイントで提示している。フラッシュカードや教科書の本文，日本語訳に加え，基本文を中心とした文法事項も入れているので，とてもテンポよく授業ができ，復習するときにも瞬時に扱うところをスクリーンに提示できる利点がある。英文や日本文のところどころに色をつけたり，写真や絵，gifアニメなども貼りつけることができ，生徒の興味・関心を引くこともできる。さらに，生徒たちはスクリーンを見ているので，教師は生徒たちと絶えずアイコンタクトがとれる利点がある。

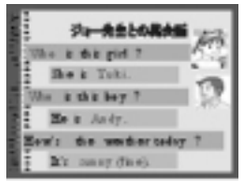
(3)「話す力」を高めるための教材の作成

パソコンの使用によって余裕ができた時間に「話す力」をつけるため次のような教材を作成し，授業で活用している。

①身近な表現を用いたQ&A教材

Q&A教材

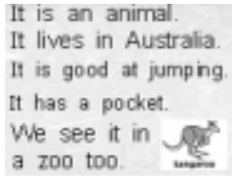


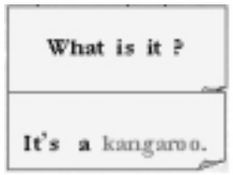


ウォームアップの時間に身近な表現をQ&Aでスクリーンに提示し，口頭練習する。英語の質問とその答えのパターンが覚えられたところで教師が質問し，生徒が自分の立場で答える。11月には英問８問の中から５問を組み合わせてカードA，B，Cを作成し，NETが生徒一人ひとりと英会話テストを行った。今年１月には，英問25問の中から５問を組み合わせ，カードA，B，C，D，Eを作成し，NETが11月と同じ形態で英会話テストを行った。採点用紙と採点基準は教師が作成した。

②ゲーム教材

ヒントゲーム





12月からウォームアップの時間に，話題の人物，動物，物などを取り上げ，生徒たちがスクリーンの絵や写真を見ながら英文でヒントを出し，手をあげて前に出てきた生徒の一人が何か当てるというゲームを行った。生徒にはとても好評で英語の苦手な生徒も意欲的に参加している。生徒からヒントが出やすくなるようにするため，It is an animal. / It is a thing. / He is a boy. / It is a sport.など，第１～第５ヒントまでの英文のパターンを生徒がある程度覚えたところでこのゲームを行っている。

③英会話教材（トムと友季のジョークで学ぶ英会話）

ジョークで学ぶ英会話

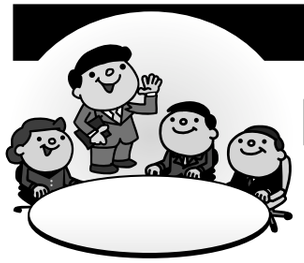
ジョークで学ぶ英会話のテキスト（スキット１～10まで掲載）を２月に配付する予定である。スキット１から順番に英文を口頭練習し，暗唱できるようになったところでペアを決め，NETとの協同授業の時間にスキットを演じるように計画している。スキットをした後はNETにコメントをもらうように考えている。テキストを見ないで演じることができたら裏表紙の欄にクリアシールを貼るようにし，生徒たちの意欲を喚起したいと考えている。英文は１年生には難しい表現もあるが，スキットにオチがあるので生徒たちは楽しんで練習に取り組むものと思われる。11月の倉敷市英語祭で参加した生徒たちがスキット６本を披露したが，内容がおもしろいので，生徒たちは英語祭に向けての練習にとても興味をもって取り組んだ。

3. NETとの協同授業へリンクした授業の展開

日々の授業の中で，英語を聞いたり，話したりする時間をできるだけ確保し，特に話すことをしっかりトレーニングすることにより，少しでも多くの生徒が教師とQ&Aを行えるようにしている。NETとの協同授業を生徒たちが英語を話す実践の場と考え，NETとのQ&Aを行うとき，できるだけ多くの生徒たちが物怖（おじ）じしないで口頭で自己表現できるようにするため，日々の授業の中で生徒たちと英語で会話する時間を設けている。

4. おわりに

パソコンを用いて説明した内容については，ノートに貼りつけるシートを作成し，基本文やその他の文法事項を問題を解きながら理解するよう指導している。また，基本文のパターンが覚えられたところで身近なことを英語で書く表現活動にも取り組んでいる。口頭で表現できても，なかなか英単語や英文が書けない生徒も見受けられる。口頭で表現できる英文は，確実に書けるよう「書く力」をつけるような指導も当然継続して行っていかなければならない。授業で学習してきた英文ができるだけ書けるように定期的に重要表現をまとめたシートに書いて覚える課題も与えているが，十分と言えないのが現状である。



「英語の授業は楽しい」を追求して

ー基礎・基本の定着とタスク活動ー

元 佐賀県佐賀市立城南中学校教諭　原 裕樹

1.「英語の授業は楽しい」

授業参観に行って自分の子どもが楽しそうに授業を受けていたらどう思いますか。チャイムと同時に生徒が「え，もう終わったの？」と言うのを聞いたら，休み時間に生徒が「次の時間は英語だ。やったー！」と言うのを聞いたらどう思いますか？

私はそんな授業でありたいと思っています。10年くらい前までの自分のスタイルは，ときどき絵やゲーム，おもしろい話を(日本語で)取り入れていたものの,「遊びじゃいけない。教科書を終わらせなければ」と思い，教科書を１ページずつ進めていました。不得意な生徒を残して個人指導もしましたが，結果が出ないと,「ここまでしてやっているのに」と思い，生徒や親のせいなどにしていました。ある年，カナダ出身のALTと一緒に働く機会を得て考えが変わりました。彼女が授業に行く前の口癖は“Let's go to the party!”です。彼女は生徒を楽しませるためには努力を惜しみませんでした。深夜までの教材作り，体育館や校外での授業，留学生を呼んでの交流活動，歌，ダンスなど，ありとあらゆる手段を使って生徒を楽しくさせようと一生懸命でした。生徒の表情が変わりました。英語の授業が楽しみで,「英語＝苦痛」と言う生徒はいませんでした。当然ながら成績がぐんぐん上がっていき，実力テストの平均がいつも70〜80点になりました。それ以来,「楽しい授業」を追求しています。

2.「楽しい授業」への手だて

(1) ゲーム，歌などの活用

苦手意識のある生徒をどうするかが課題です。授業は最初が肝心。始まりをうまくやれば１時間があっという間に過ぎます。１学期は週に２回ウォームアップとしてカルタ，ドミノ，ぶたのしっぽなどを使って彼らをひきつける努力をしました。単なる遊びにならないように慣用表現や教科書に関連した語彙を組み入れています。生徒は楽しむためには英語を覚えなければなりません。

(2) 指導すべき言語材料の精選

ゲームや活動をするためには時間を作り出すことが必要です。教科書を１ページずつ進んだのではとうてい時間が足りません。そこで学校の英語担当者や地域の教師たちの力を借りて，３年間で覚えるべき単語，連語，文型，慣用表現，特有の場面での会話などをリストアップし，ハンドブックを作成しました。そうすることで活動の時間を生み出しました。

(3) テストで「過去最高点」を取らせる

いくら授業が楽しくても結果が伴わないとやる気は続きません。定期テストの３週間前から小テストで特訓をします。一人ひとりの習得度を把握するために一覧表を教室に掲示し，項目ごとにマーカーでチェックします。生徒は何を勉強すべきか，自分が今どれくらい理解しているかが見えてきます。テストを利用して習得させること，英語のテストは点を取れると暗示をかけることです。

(4)「話せるようになりたい」

タスク活動が一番です。学習指導要領の「言語の使用場面の例」や「身近な暮らしにかかわる場面」などにあげられた「電話」,「道案内」,「食事」,「依頼する」などを整理します。既習文型と慣用表現をまんべんなく組み込み，生徒が興味をもちそうな対話文を作ります。習った文型や表現を実際に活用する機会が必要です。授業中に暗唱させ，生徒たちがオリジナルに作り変えたものでスピーキングテストをします。生徒はこのテストを楽しみにしています。

3. おわりに

生徒のアンケートでは94%が「授業が楽しい」と答え，テストの結果も向上しました。24年度から新学習指導要領が施行されます。一人で悩まずに学校や地域内の先生方と協力し合って教材を作り，生徒にとっても教師にとっても「楽しい授業」ができるように目指してみてはどうでしょう。

私の授業実践報告

東京都狛江市立狛江第一中学校教諭　横山 牧子

1. 言語の本質

授業計画を立てるとき，私は英語に必要とされる「４技能」をバランスよく，３年間かけて生徒に身につけさせるためにはどうしたらよいかということを考えて計画を練っています。教師になりたての頃，運よく，長勝彦先生(武蔵野大学)の研究授業を観る機会に恵まれました。その授業は,「中学生でもこんなに自然に英語を話すことができるんだ！」ということに感動させられた授業でした。

そのとき,「大切なことは，授業の中でくり返して，今まで習ってきた文を復習すること。中学校３年間で，自信をもって教科書が音読できるような力をつけさせたい」と先生が話されたことがとても印象的でした。

それから私はいかに「いろいろな場面で既習の文を取り入れて，生徒に飽きさせず授業できるか」を考えて授業作りをしてきました。今回は，これまでの中でも効果的だったWarm-Up活動について紹介します。

2. 効果的だったWarm-Up活動

授業の中で，その日の授業の雰囲気を作るWarm-Up活動として，英語の歌やビンゴを行うのはよくある活動ですが，Dictation TestもWarm-Upとしては，とても効果的な活動です。実施する時期を考慮して行う取り組みですが，生徒たちにとっては，今まで習ってきたことの復習も兼ねているので無理なく取り組め，とても効果的でした。

●Dictation TestとCategory Writing をペアにして行う活動

【実施時期】

２年生２学期後半〜３年生

【目的】

この時期は，英語の不得意な生徒はなかなかやる気を出せず，学習意欲をもつのが難しい。そこで，１年生の教科書を使用してdictationを行い，リスニング能力の向上と英語を書くことに慣れさせる。さらに，語彙力をつけるためにCategory Writing を行う。

【手順】

あらかじめ，生徒には「この週はレッスンのどのセクションのdictationを行うか」を知らせておく。

(授業中の手順)

①その日のテスト範囲になっているページを２回全員で音読する。

②教師が本文を音読し，読まれた最後の英文をテスト用紙に書く。

③その日の英文が書けたら，その用紙の裏に「今日のトピック」についてわかる単語をどんどん書いていく(制限時間１分)。

☆トピック例

花，動物，色，身体の部分，７曜日，12か月，季節に関する語(春や夏など)，クリスマスに関する語など

④Category Topicの確認をする。生徒は，dictation用のノートを作り，毎回のテストを貼ったり，間違えた英文を練習したり，Category Writingの単語をまとめたりする。→最終的に提出する。

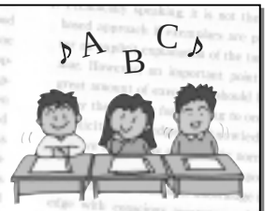
3. おわりに

ここで述べた活動以外にも，効果的な実践はあると思いますが，私が行ったこの実践は，２年生の後半から行うと，ちょうど３年生への英語の「橋渡し」の役目にもなっていたようです。また，Category Writing をすることで，生徒たちは今まで習ってきた単語について，違った視点から単語を覚えることができたようです。

連載：小学校英語,中学校にどう生かす？

第2回

小・中の英語を結ぶ「対話指導」



千葉大学教授　西垣 知佳子

1. はじめに

新しい学習指導要領によって，小学校では平成23年度から5，6年生を対象に週1時間の外国語活動が全面実施されます。これによりこれまで全国でバラバラに行われていた小学校英語の取り組みが，一つの基本路線に沿ってまとめられました。さらに中学校では英語の授業時間が週1時間増えます。こうした状況から，英語教師には，これまで以上に子どもたちの英語力を伸ばすことが期待されるでしょう。

本稿では，英語教育の効果を上げるために，小学校外国語活動を中学校英語教育にスムーズにつなぐ方策を「対話指導」という視点から考えます。

2. 小学校の外国語活動と中学校の英語教育

小学校の外国語活動（以下，英語活動）と中学校の英語教育は，どちらもコミュニケーション能力の向上を目的とする点で共通しています。しかし，そのための方策は異なります。小学校では，外国語による言語体験を通してコミュニケーション能力の「素地」を養うのに対して，中学校では言語運用能力の向上を図りながらコミュニケーション能力の「基礎」を養います。小・中の連携には，こうした異なるものを，スムーズにつなげることが求められます。では，小学校で行われる対話活動は，中学校のそれと比べてどのようなことが特徴的でしょうか。5つの点から考えます。

(1) 慣れ親しむ

小学校の学習指導要領では「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」という目標が掲げられていて，「慣れ親しむ」点が特徴となっています。つまり小学校では英語の表現や対話のパターンを学んで定着させることは求められていません。そのため『英語ノート』で扱う内容も，英語そのものを学ぶというよりも，国際理解につながるようなテーマや活動を通して，それを表現するための対話を理解して活動するという位置づけになっています。

授業では子どもたちは，教師が示すイラスト，写真，実物，絵本などを通して，教師が発する英語やCDの英語を理解し，単語レベルの英語を次々と発話して反応します。たとえ誤りがあっても，教師が指摘したり，修正することはありません。子どもが日本語で反応しても受け入れられます。反応していること自体が，聞いて理解していることの表れだからです。

(2) 音声中心

小学校の英語活動は音声中心です。そのため『英語ノート』にはほとんど文字も英文もありません。耳を通してことばに触れて身につけるという点で，小学校の英語活動は，第1言語の習得により近い方法にもとづいて行われます。一方，中学校では，音声英語のスキル向上を目指しているものの，目と文字を通した学習が中心となっています。

(3) カリキュラムの編成

小学校の英語活動では，主に場面やトピックをもとにしたカリキュラム構成になっていて，中学校のような文法事項にもとづく教材配列ではありません。『英語ノート 2』の最後のLesson 9「将来の夢を紹介しよう」では，What do you want to be? ― I want to be an astronaut. という対話が扱われていますが，中学校の基準からすると高度なレベルの対話です。

(4) まるごと覚える

中学校では，英語を知識として教えますが，小学校はそうではありません。例えば，『英語ノート 1』では，What's this? ― It's a pencil. という対話が扱われますが，何かわからないものについてたずねるとき，答えるときの決まり文句として体験的に状況の中でことばを理解します。

たとえば幼い子どもが，おままごとで「たいへん結構なお味でございます。おいしゅうございます」と話しているのを聞いて，驚いたことがあります。考えてみると，子どもは一つひとつのことばの意味を理解して使っているわけではなく，大人がそう言っているのを聞いて,「おいしい食事をいただいたときにそう言うのだ」ということを状況と表現をセットにしてまるごと覚えていて，それをまねて言っていることがわかりました。小学校英語活動ではこのようにして，状況と対話を結びつけてまるごと身につけます。

(5) 豊かなことばの投げかけ

小学校の英語活動を参観させていただいて感心することは数多くありますが，特に驚くのは，ことばの投げかけの豊かさです。小学校の英語活動では，This is an apple. Repeat after me. Apple! と，ことばを教え込もうとすることはなく，Wow, what a big apple! It's red. It looks delicious. I want to eat it. Do you like apples, Makiko?と，意味ある文脈の中で豊かなことばの投げかけが行われています。しかも指導者の話し方や声の調子が優しく，まるで母親が子どもに話かけているようです。

3. 中学校の英語教育に求められること

以上のことを踏まえ，子どもたちの対話力を伸ばすには，中学校ではどのようなことがポイントとなるでしょう。以下，4つのことを考えます。

(1) 目的意識

中学校の英語では，指導する言語材料にもとづいて授業が展開され，自己表現を目指して発信力の養成が重視されます。その結果，ややもすると「言わせるためにことばを教え込む」,「断片的な対話を覚えさせて，すぐに言わせる」という活動になってしまうことがあります。英語との接触量，使用量が限られている日本の英語習得の状況では，丸暗記やパターン・プラクティスのような機械的ドリルは効率がよく，必要ではありますが，体験重視の小学校英語で大切にされてきた英語を使う「目的意識」が希薄になりがちです。

そこで，学ぶ意義を感じられるように，授業では扱う題材に必然性をもたせることが大切になります。場面，季節，学校行事，流行などをとらえて，言語材料に必然性をもたせ，子どもたちの動機づけを高めるようにするとよいでしょう。

(2) コミュニケーションの意義

中学校では，英語の授業では発信に重きが置かれて，本来のコミュニケーションの意義が忘れられてしまうことがあります。コミュニケーションの語源はラテン語で「他人と共有した」ということで，communic-は「共有の」，-ateは「～にする」ということです。コミュニケーション本来の意義を考えると，コミュニケーション活動では，自分のことを表現させることにとどまらず，その場を共有する子どもたちが話者の伝えたいことをとらえて意味を理解し，それを共有して分かち合うような活動を目指したいと考えます。

(3) 言語の意識化

小学校でまるごと覚えていたことばを中学校では文法という視点からとらえ直します。たとえば，それまでまるごと覚えていた「ハウアーユー」は，how, are, you の3つの単語から構成されていることを理解し，さらに必要に応じてHow is your father?と，自分で文を組み立てて応用して使えるようにします。正しい英語を使うことの重要性を理解させ，文法的に正確な英語を使うように指導します。また中学校で本格的に学ぶ文字を活用して，単語や文法の理解を支援します。

(4) 既習事項を深める

これまで中学校で行われていた道案内，買い物などの活動は，小学校ですでに経験していることが予想されます。したがって，小学校で行ったことがある活動に対して中学校では，ワンランク上の対話力へと引き上げることが必要となります。たとえば，小学校では食べ物の話題に対してWhat do you like? ― Ice cream. と受け答えが言い切りになります。中学校では，好きな理由を加えるなど，対話を深めて発展させる力を目指します。

小学校で蒔かれた英語力の種を中学校で大きく育て，将来花咲かせるには，小・中の連携は不可欠です。中学校から見ると小学校英語はもの足りなく見える部分もあるかもしれませんが，お互いに理解・協力し，英語教育の実を上げたいと考えます。

英語教師の裏ワザ

データを取ろう(月)

東京都港区立赤坂中学校教諭　**北原 延晃**

1. はじめに

平成23年度からいよいよ小学校英語活動が本格始動する。受け入れの中学校でも準備をしておきたい。今回は小学校英語のデータ取りについてお話しする。

2. 中学版英検5級Can-Doリスト

下の表は「英検Can-Doリスト」(英検合格者の実際の英語使用に対する自信の度合い)を北原が2007年に英検研究助成論文で中学生用に書きかえたものの抜粋である。これを使って2008年４月入学の１年生(31名)を定期的に調査した。表中の反転数字はほぼ全員が自信があると答えたものである。

3. 考察

この調査が授業に役立ったことが３つある。

①本校に入学してくる生徒はアルファベットの読み書きがかなりできる。したがって従来のようにペンマンシップの指導に時間をかけなくてもよくなった。結果的には金と時間の節約になった。

②学期の切れ目ごとに調査することによって生徒の苦手な内容に授業を焦点化することができた。

③アンケートに生徒名が書いてあるので，各生徒の苦手な内容について個人指導が効果的にできた。

なお，このリストは北研HP（http://www2.hamajima.co.jp/~kitaken/）で入手できる。５級から準２級まであるので活用していただきたい。

【読む】		4月	9月	12月	3月
1	アルファベットの大文字と小文字が読める。	28	29	30	31
2	アルファベットが順番通りに言える。	27	29	30	30
3	ピリオド(.)，クエスチョンマーク(?)，カンマ(,)，引用符(“ ”)，感嘆符(！)を理解することができる。		19	28	28
4	英和辞書を引いて目的の語を見つけることができる。	13	28	29	31
5	日常生活の身近な単語を読んで理解することができる。(例：dog / eat / happy)	24	24	30	31
9	教科書をスラスラ音読できる。		13	19	24
【聞く】					
1	初歩的な語句や決まり文句を聞いて理解することができる。(Three books. / I don't know. / Here you are.など)	9	22	29	30
2	アルファベットを聞いて，どの文字かを思い浮かべることができる。	28	29	29	31
3	日常生活の身近な単語を聞いて，その意味を理解することができる。(例：dog / eat)	24	26	29	31
4	曜日，日付，天候を聞き取ることができる。(例：Monday / September 14 / cloudy)	13	16	26	30
5	日常生活の身近な数字を聞き取ることができる。(電話番号，時間，年齢など)	18	18	29	31
6	日常的なあいさつを理解することができる。(例：How are you? / Nice to meet you.)	29	27	30	31
【話す】					
1	アルファベットを見てその文字を発音することができる。	26	27	30	31
2	日常生活の身近な単語を発音することができる。(例：dog / eat / happy)	22	26	29	31
3	日常生活の身近な数字を言うことができる。(電話番号，時間，年齢など)	16	13	24	27
4	簡単なあいさつをかわすことができる。(例：Good morning. / Good night.)	25	28	29	31
5	あやまったり，お礼を言ったりすることができる。(例：I'm sorry. / Thank you.)	29	26	29	31
6	日常生活の身近な話題について，Yes / Noで答える質問に答えることができる。(「好き」「嫌い」など)	18	26	29	31
9	友だちと２行の簡単なペアワーク(対話)ができる。	12	15	25	27
【書く】					
1	アルファベットの大文字と小文字が書ける。	28	29	29	31
2	英語の書き方のきまりに合わせて正しく文が書ける。(先頭は大文字，単語と単語の間は少しはなす，文の最後にはピリオド(.)かクエスチョンマーク(?)など)		20	29	29
3	黒板に書かれた文や教科書の文を正しくノートに写せる。		28	30	31
6	短い文であれば，英語の語順で書くことができる。(例：I go to school at eight.)		12	23	25
【語い】					
1	教科書に出てくる語のうち，簡単な語は発音できるし，意味もわかる。		23	28	29

書評

リフレクティブな英語教育をめざして―教師の語りが拓く授業研究

吉田達弘　玉井健　横溝紳一郎　今井裕之　柳瀬陽介　編

最近の学校教育を取り巻く状況の変化から，教師への信頼が著しく低下している印象をもつ。教師は日々の業務の忙しさの中で自己を見失い，指導にも自信をなくしている。このような状況の中で，教師が授業実践の中で自らの成長を振り返り，同僚，生徒と互いに学び合い，成長を確かめ合う授業研究の方法論とその具体的な実践例を紹介した本が出版された。この本を通して，より多くの英語教師が授業研究に挑む活力を得られることを心より望んでいる。

本書は，教師が自らの学びと成長を求めて，授業・教師教育研究を進める方法として，自らの成長や経験を「語り」の形で記述し，その実践と研究の中から理論を作り上げる新しい英語教育の研究手法を生み出すことをめざしている。自らの授業実践を語り，誰もが利用可能な資料とするための方法と理論を，豊富な実例を示しながら紹介している。

教師が実践と研究の両面で成長する方法として大きく３つの提案をしている。

第１は，授業実践研究方法として，３つの方法が提案されている。

①協働的課題探求型アクションリサーチ

授業の一つひとつの事例を多角的・総合的に検討し，その事例に対する教師の洞察・判断等を記述する課題探求的アクションリサーチを紹介する。さらに教師の成長支援のために，授業実践事例の結果よりもプロセスに注目し，参加者全員が発展途上の教師であるとの認識に立つ非批判的な授業実践報告会の開催をすすめている。

②リフレクティブ・プラクティス

授業者は自らの授業内容(学習目標，指導上の目標，進行プラン)と授業後のリフレクション(授業内の事実，考えたこと，感情的な反応など)をジャーナルとして記録する。後日それを読み返し，メンターとのインタビューを通して，ジャーナルの内容を学びの観点から解釈し，一つの出来事を多角的な視点から眺めて，今まで気づかなかったことを発見し，より豊かな理解を促す。より深まった理解が次の実践を生み出してゆく。このサイクルが，授業実践での学びを深く確かなものとしてくれる。

③探求的実践

教師と生徒が教室で何をしているのかをしっかりと理解するために，授業に対する多様な見方，その見方を踏まえた授業の語りを通して，教室生活の質の向上をめざす方法を提案している。

第２の提案は，教員どうしの情報交換や教員研修への参加である。研修への参加を通して学ぶために，紹介された技をまねるのではなく，その技のHOW(方法)，WHY(目的)，WHAT(正体)を言語化し，次にその技を自分なりに使い方を工夫しながら会得する，最後にその技に関する判断力を培うことである。このように研修を「すぐに役立つ技を教えてもらえる」という外面的な学びでなく，講師の授業実践の中から，自分を振り返り，自分と学習者の関係を知る機会を得て，学びを深める場としてとらえることが大切としている。

第３の提案は質的研究である。客観的データとその統計的処理にもとづく質的研究の成果を活かしながら，質的研究方法を加えることで，授業の多様な状態を明らかにすることができるとして，質的研究の特徴，方法，分析と記述などについて簡潔にまとめられ，たいへん参考になる。

筆者が１人称でそれぞれの体験を語る事例研究として，ティームティーチングにおける同僚教師の内的変化の軌跡や，ALTとJTEの互いの認識の違いが生み出す両者の関係の変容が紹介されている。また長期共同研究の実践において，担当教員と研究者が小学校英語活動を進めるにあたって，学び合う過程や児童の変容，研究者の立場の変容を具体的に記述された事例も報告され，授業実践の「語り」とは何かを理解する助けとなっている。

本書で紹介された提案を参考に，仲間，生徒とともに成長できる教師をめざしたいと思わせる書籍である。是非，手元に置いて読んでいただきたい。　　(大阪成蹊大学教授　國方 太司)

[A5判・344頁　定価2,730円(本体2,600円)発行：ひつじ書房]

英語教育時評

「英語で授業」どこまでやるか

昨年３月に高等学校の新学習指導要領が告示されたとき，科目の大幅な変更とともに注目されたのが，「授業は英語で行うことを基本とする」という一項でした。これを前向きにとらえる方もいる半面，重荷と感じている方も少なからずいるのが現状でしょう。やはり，口頭での英語運用に不安感をお持ちの方が多いようです。

一般に高校の英語教師は英語の文法や構文に造詣が深く，解説するのが好きな傾向にあります。しかし中学校の英語教師と違い，ペアワークやグループワークなど，生徒に任せる時間を設定するのが苦手のようです。その結果，授業の大部分を先生の解説が占め，生徒が英語を使う時間がほとんどないという授業もいまだに見られます。

もちろん，第２言語ではなく，外国語として英語を学ぶ私たちには，文法や構文の学習は大切です。解説も必要な場面があるでしょう。しかし，それだけでは十分ではありません。読むこと，書くことの指導ならできるが，聞くこと，話すことの指導はできないというのであれば，プロの英語教師としては不十分ではないでしょうか。

もし解説中心の授業をまだ行っているのでしたら，今回の学習指導要領の改訂を機に，自らの授業の改革に挑んでみてはどうでしょう。すなわち，教師が英語を解説する場ではなく，音声面を含めた英語のトレーニングを生徒にさせる場に変えるのです。例外はあるにせよ，日本の高校生には授業以外に英語を使う機会はほとんどありません。授業で英語を使うことがなければ，実践的コミュニケーション能力の育成など不可能です。

そうは言っても，学習指導要領が示すように「生徒の理解の程度に応じた英語」で授業を進めることは，簡単ではありません。音声面での指導を苦手と考えている先生方には，日々の空き時間や授業を訓練の場とし，自らの音声スキルを高めるような努力が必要です。一朝一夕でスムーズな英語による授業ができるものではありませんが，そうするために重要な点を，以下に３つあげておきます。

①英語を口に出すことを日課にする

埼玉大学の靜哲人先生のように，生徒が誤った発音をしたときは即座に指摘，修正できるようになりたいものです。そのためにはNHKラジオの英会話番組を利用して口に出して英語を読む，名文を音読するなど教師自身の日常のトレーニングが欠かせません。授業ではSmall TalkやOral Interactionなどで生徒に理解可能な英語のインプットを与える訓練をしましょう。

②生徒に英語を使わせる

「英語で授業」と言っても，教師が一人で英語を話し続けるのではなく，できるかぎり生徒に英語を使わせる場面を設定しましょう。ペアやグループで語句の口頭練習をさせたり，さまざまな音読活動に取り組ませたりしましょう。

③英語 → 日本語から日本語 → 英語へ

授業の最終目的は，生徒に英語を産出させることです。訳読をさせてもいいですが，そこで終わりにせず，その訳をもとにして英語を言わせたり書かせたりする活動までもっていくことが大切です。和訳先渡し方式などで，日本語から覚えてもらいたい英語の表現を探させれば，アウトプットのための時間が生み出せるでしょう。

結局，どこまで英語を使って授業を行うかは，生徒の状況が一番わかっている，それぞれの先生の判断にまかされます。やろうと思えばすべて英語で授業はできるが，より効果的だと判断すれば日本語も用いる。さらに自らの説明は最小限にして，できるかぎり生徒に英語を使わせるようにするのが，英語教師がこれから目指すべき方向であると思います。

（北海道教育大学准教授　笠原 究）

参考文献

靜 哲人.(2009).『英語授業の心・技・体』研究社

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起，実践報告，研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが，本誌は今後，2010年７月，9月，2011年１月，３月にそれぞれ発行の予定ですので，原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

① 22字詰×72行以内（本文分量）
② 二重投稿はご遠慮ください。
③ 採用分には薄謝を進呈いたします。